

## まえがき

西 成彦

ヨーロッパとアフリカと南北アメリカを股にかけた、いわゆる「三角貿易」がいかに巨大な本源的蓄積を生み出したかについては知られている。そしてそれらは、環大西洋地域における、キリスト教、および西欧列強の諸言語の影響力の増大をも意味した。

しかし、そこで見逃してならないのは、南北アメリカの大西洋沿岸地域、およびカリブ海島嶼地域のあいだの人の行き来、文化の行き来である。フランス領マルチニーク出身のマリーズ・コンデが『私はティチューバ』や『悪辣な生』（邦題は『人生の樹』）などで描いた「動産」としての奴隷の生や、「労働力」としての解放奴隷の生は、まさに南北アメリカ大陸自体が「マージナルな移動」によって、「多言語的なアメリカ」の形成に大きな影響力を及ぼしてきたことをみごとに描いている。

カリブ海地域と北米とのあいだに交易の道を拓いた西洋列強。パナマ運河の開削のために広域から労働力をかき集めた合衆国の思惑。そうしたなかで分断されていたアフリカ系住民が「黒人」としての自覚に目覚め、北米においても、またヨーロッパにおいても「白人なるもの」との対決を迫られていった経緯。そこには第二次世界大戦の混乱がもたらした、ヨーロッパ知識人や芸術家の「亡命」という現象もからみあうだろう。そして、カリブ海沿岸から中南米地域にかけてを自国の前庭にしようとする合衆国の野心に惑わされるかのようにして、しだいに北米とのつながりを深めつつあるカリブ海世界。

ここでは、2016年2月刊行の『言語文化研究』27巻2-3合併号につづいて、国際言語文化研究所の「プロジェクト A1 研究所重点プログラム〈環カリブ地域における言語横断的な文化／文学の研究〉」の成果を特集にまとめることにした。

同プログラムは、2016年4月以降「プロジェクト A1 研究所重点研究プログラム〈文化の移動と紛争的インターフェース〉」へと再編の途上にあるが、これは2011年度から5年間続けてきた「環カリブ文化研究会」の活動成果である。

なお大野藍梨論文は研究会メンバーによる査読を経た上での掲載である。

